

『どんな宗教でも救われますか?』 <登るなら主峰をめざせ>

聖書箇所：

ヨハネによる福音書14章1節～6節

- 1：「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、また私を信じなさい。
- 2：わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えにいくのです。
- 3：わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとのに迎えます。私のいる所に、あなたがたもおらせるためです。
- 4：わたしの行く道はあなたがたも知っています。」
- 5：トマスはイエスに言った。「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。」
- 6：イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

メッセージ骨子：

<序論> 富士山の場合、山頂に至るには3つの登山道があります。これを見て、世界にはいろいろな宗教があるけど、山登りと同じで、道は違えど行き着く先は同じ、どんな宗教も一緒だという人がいます。また大きな鏡が割れて世界中の宗教ができた、だからもとはと言えば同じことなのだという説明もどこかで聞いたことがあります。でも本当にそうでしょうか？

<ポイント1> 『我々が上って行くのか、それとも神が下ってこられるのか』

歴史上多くの人が神に至る道を示し、また多くの修行者、求道者が山の高みを目指して来ました。でもイエス様は天から下り、私たちの生活の場に来てくださいました。そして『私が道です』、**I am the way** と言われました。この定冠詞の **the** は、それが唯一の道であることを示しています。

『私のほかに神はいない。正義の神、救い主、私をおいて他にはいない。地の果てのすべての者よ。私を仰ぎ見て救われよ。私が神である。他にはいない』(イザヤ45：21-22)

『この方以外には、誰によっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。』(使徒4：12)

<ポイント2> 『死で終わりか、それともそこから始まるのか』

2000年前、そのキリストの死を通して弟子たちは生まれ変わり、本当の生き方を見つけました。愛する人の死はだれにとっても激震です。でもロシアの文豪ツルゲーネフは『愛は死より強い』と言いました。愛する者の「死」が、残された者に本当の「生」を教えるということがあるからです。キリストの死は私のためだったとクリスチャンは理解しています。キリストの死があたかも一巻の終わりのように見えながら、そこに本当の始まりがあった。実はこれこそが愛のなせる奇跡、十字架の最大のパラドックスなのではないでしょうか。

<ポイント3> 『愛なのか、それともそれ以外なのか』

ワルター・トロビッシュ博士は「自分が愛された実感のない人、自分を好きになれない人は、人を愛することができない」と言っています。神を愛し、自分を愛し、人を愛する。この3つの愛のスタートポイントは「神の愛」にあります。神の愛は2000年前のキリストの十字架に示されました。『私が道であり、真理であり、命です』と言われたキリストの愛だけが私たちを救うのです。

『キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。』(Iヨハネ3：16)

『人が友のために命を捨てるという、これよりも大きな愛は誰も持っていません』(ヨハネ15：13)

<まとめ> この世での繁栄、人生の成功は、甘美な主からの祝福、ご褒美です。でもわれわれの人生登山、連山を踏破したとしても最後がやっぱり肝心。どうせ登るなら、人生の最高峰である『救い』と『永遠の命』を手にしようではありませんか。命の丘にわが名を記そうではありませんか。